
銀鬼一目覚めへの導一

siro

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

銀鬼―目覚めへの導―

【Nコード】

N1841S

【作者名】

s i r o

【あらすじ】

銀華はある日、人間界から異世界ルーベルム（魔界）に来てしまう。そこで銀華は、レイリール族の鬼、銀鬼一族の姫だと告げられ、従者のレイをつけられる。

もしかしたら、行方不明の兄がこの世界にいるかもしれない……。それを聞き、兄を探す旅に出ようとする銀華を閉じ込める。しかも、人間の血が交ざっている銀華を殺そうと企んでいる人がいて……。

プロローグ

『銀華、強く優しく生きていくんだよ。』

『うん!』

銀華には、何故兄がこんなことを言いだしたのか分からなかったが、大好きな兄の言うことは、正しいはずだからと思い頷く。

『……どんなことがあっても、心を闇に閉ざしたらだめだ。“鬼”が暴れだすから。』

『おに? 恐いの来るの?』

銀華は、不安そうな顔で兄を見つめる。

『大丈夫だよ。僕がいる。それに……、きっと僕がいなくなっても、君を守ってくれる存在が現れるよ。』

寂しそうな優しい笑みを浮かべる。

『いやっ! お兄ちゃんどっか行っちゃうの?! いやだっ!』

銀華は、癩癩をおこしそうに言う。

兄は、やはり寂しそうに笑って何も答えない。

『ぎ、銀華いいこにする。だから……、だから行かないで! 銀華を一人にしないでっ!!』

あとからあとからと、銀華の大きな瞳から出てくる涙は、頬を濡らす。

『銀華……。』

銀華の頭を愛おしそうに優しく撫でる。

『ずっと側にいたい……。でも、僕にはやらなければならないことがあるんだ……。』

優しい、でもその瞳の中にある決意はとても強く揺るがない。

『大切なことなの？』

泣きながらも、兄の顔を見て聞く。

『うん。とてもね。』

真剣に銀華の顔を見て頷く。

『か、帰ってくる？』

『うん、もちろん。』

優しく微笑む。

『じゃあ、待ってる。銀華、お兄ちゃん帰ってくるまでずっと待ってる！』

『うん。』

嬉しそうな顔をする兄を見て銀華は安心した。

——帰ってくる。銀華は、一人じゃない。——

そして、兄は数年後に銀華の前から姿を消した——……………。

—*—*—*—*—*—*

「ねえー、城東さん。あんたさあ、ちょっと見た目が良いからって、調子のんないでくれる？うざいの。」

放課後の学校の教室で、数人の女生徒が一つの机を囲む。

「……五月蠅いんだけど。邪魔だし。」

囲まれているにもかかわらず、女の子は機嫌悪そうに絡んできた女子達を睨む。

「……っ?! あ、あんたなんて貧乏だしどうせその身体でお金稼いでんでしょ? 淫乱!」

そして、頭から水がかけられる。ご丁寧なことに、バケツに入れたきた水だ。

「いい様ね。」

女子達がクスクスと笑う。

「ふっ、脳ミソの軽いことで。勝手に想像するのはいいけど、決めつけんな! 不愉快。」

少しきれ気味に水浸しになった女の子は言う。彼女、城東 銀華^{ぎんか}は、一昨年中学三年生に進級したばかりだ。

元々仲の悪いグループと同じクラスになってしまったのが原因だ。

「退いてくれないなら、勝手に行くから。」

銀華は、艶やかな黒く長い黒髪を絞りながら机の上に上がり言う。
「あんた逃げれると思ってるの?!」

「もちろん。じゃあ、明日ね。脳軽さん達。」

刹那、既に銀華は、廊下側のドアの方にいた。

ジャンプして、女生徒達を飛び越えたのだ。

「……ちよっ、ま、待ちなさいよっ!!」

後ろの方で声が聞こえたが、無視して廊下を走った。

「はぁー、明日もガミガミ言われるのかー。」

銀華は、ため息をつきながらも、校門に向かった。すると、

「城東 銀華様でございますね?」

行き成り腕を掴まれる。帽子、サングラス、スーツ黒ずくめの男が三人。

（うわー、絵に書いたような怪しい人達……。）

「は、放してっ!」

銀華は、無理やり腕を引っ張って直ぐ様、男達がいらない方向に走った。

「逃げれませんよ。私達はあなた様をお迎えに来たのです。」

男達も走りだす。彼女を追って。

銀華は、足には自信があった。けど、男達も速かった。

（速い!このままじゃ追い付かれる!）

銀華は公園に逃げ込んだ。茂みに隠れていると……。

「お姉ちゃん、どうしたの?追われてるの?僕が助けてあげる。」

ふと、クリクリの大きな黒い瞳のかわいい六歳ぐらいの男の子が小声で聞いてきた。

「え?」

返事を返すよりも早く、男の子は男達の前に出ていた。

「なんだ、ガキか。お前、こちらで女を見なかったか？」

男は言葉使いが、銀華と話していたときと、打って変わっていた。
「見てないよ。」 男の子は首を横に振りながら言った。

「ちっ、使えない。」

「わっ！」

男が男の子を池の方に蹴り飛ばす。

「危ないっ!!」

私は、男達の間を通り男の子が落ちた池に飛び込もうとして……
…、

「お姉ちゃん？」

自力で這い出た男の子がこちらを見つめる。

「よかつ……た。あっ！」

銀華は、何かに足を引っ張られているようで、どんどん底に沈んでいった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1841s/>

銀鬼一目覚めへの導一

2011年10月8日22時48分発行